

松山城三之丸跡 13次・14次調査

【三之丸跡 13次調査】

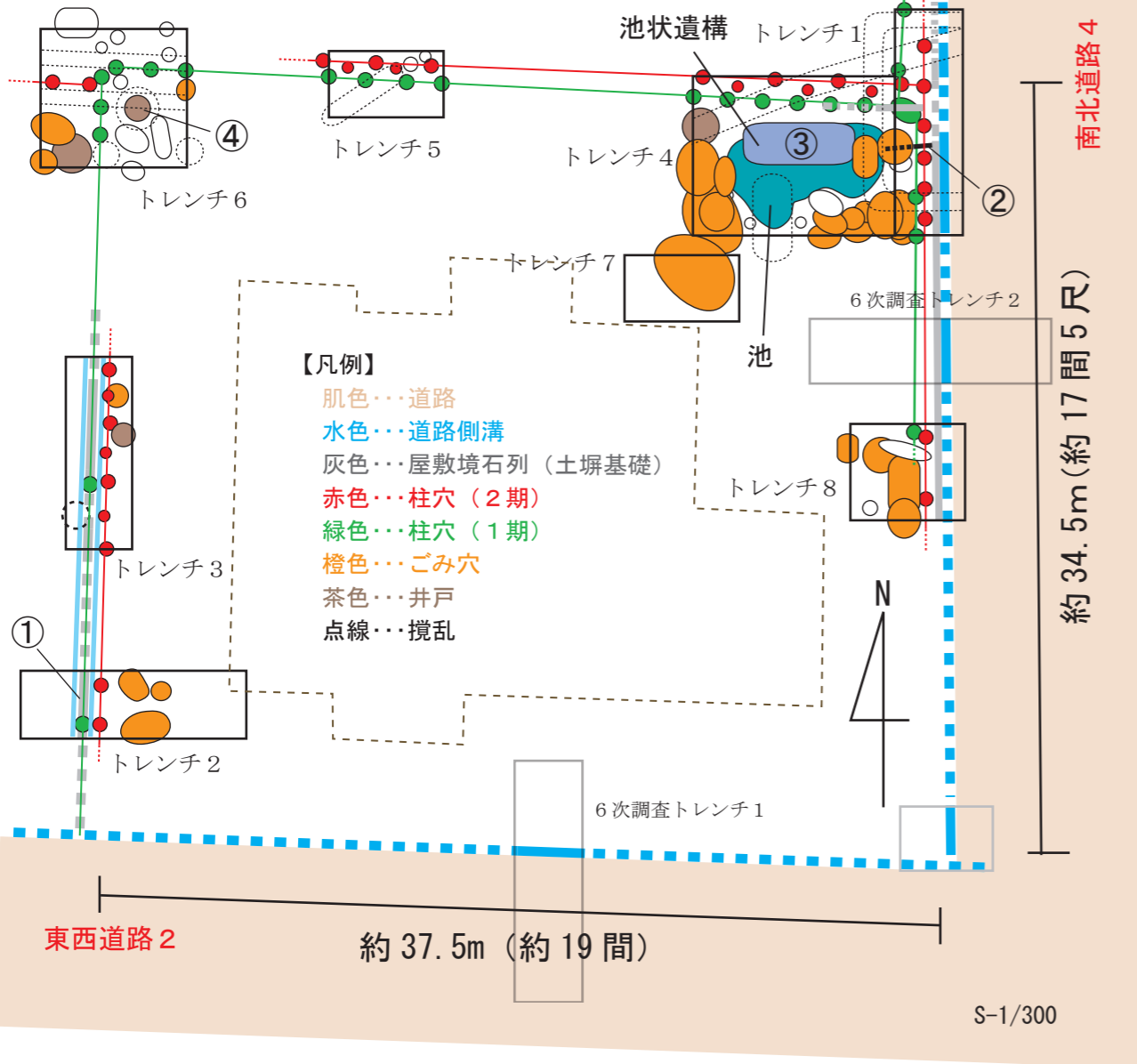
屋敷境（塀跡、溝）と屋敷地内の池と思われる遺構、廃棄土坑（ごみ穴）、井戸などを確認しました。

屋敷境は、北辺と西辺を検出しました。一番古いもの（1期）は、素掘りの柱穴列で構成され、いくつかは礎石を有しています。その後柱穴は埋め戻され、境筋はそのままだに石組列が造られています（2期）。また、やや境筋を平行して、別の素掘りの柱穴列を確認しています。これらのことから、2時期あるいは3時期の屋敷境が存在すると考えています。また、屋敷境を確認できたことから、敷地面積が約1300㎡（約400坪）あることが分かりました。この敷地面積は、県民館跡地（現、県美術館）の発掘調査で判明した侍屋敷の面積とほぼ同じです。

池は、屋敷地の北奥で検出しました。池の排水は、オーバーフローにより瓦製の排水路を通して道路側溝に流れる仕組みとなっていました。また、元の池を改修して枡形の池状遺構が造られており、この遺構の中心部には廃絶時の儀礼が行われたような痕跡が残っています。

井戸は、屋敷境付近で桶積み、瓦積み、石積みのもの4基を検出しました。

出土遺物は、屋敷地内を調査したため、道路を対象としたこれまでの調査よりも多く、その分バラエティ豊かです。その種類は、瓦、陶磁器、漆器、銅製品、鼈甲製品、石製品、ガラス製品、食物残渣などがあり、特に漆器とガラス製品は、松山市が実施した松山城跡の調査では初めての出土です。陶磁器は、唐津や有田（佐賀）、瀬戸・美濃（愛知・岐阜）のものが多くを占めますが、源内焼（香川）や砥部焼もこれまでより多く出土しています。これらのことから、当時の上級武士の生活の一端をうかがうことができます。



①トレンチ2 屋敷境（石列）〈北東より〉



②トレンチ1 池の排水施設〈北東より〉



③トレンチ4 池状遺構の廃絶儀礼跡〈北東より〉



④トレンチ6 瓦積み井戸〈西より〉

【三之丸跡 14次調査】

地表から約3m50cm下に三之丸御殿の西端である石垣を確認しました。この石垣は、残念ながら根石しか残っていませんでしたが、全体として重厚かつ強固な造りで、松山城の他の石垣と比べても遜色のないものでした。築石は、全て大振りの花崗岩が使用され、裏込石（栗石）も大きく、その範囲は調査区よりさらに東に広がっています。江戸時代の絵図には、調査箇所にあたる部分に低い石垣とその上に建つ長屋と二階の櫓が描かれています。これらのことから、この石垣の上部には、何らかの建物が建てられていた可能性が高いと考えています。

また、石垣の直上、特に築石が抜かれたと見られる跡は、灰や焼土を含んだ土で覆われており、その上に造成土を被せて新たな地表面を造っていました。文献では、三之丸御殿は明治3（1871）年に焼失しており、この灰や焼土がこの時期のものかは今後の検討課題です。



トレンチ1 三之丸御殿西石垣〈北西より〉



トレンチ1 三之丸御殿西石垣〈西より〉